

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Comparative Analyses : Results : Basketry and Pottery 2600

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福川, 圭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003701

バスケット・土器 2600

福 川 圭 子*

1. バスケットとかご

2. 土器

1. バスケットとかご

バスケットは、多数のすぐれた材料（竹、籐、パンダナスの葉、つる性植物など）が存在していれば、その編細工の技術はほとんどいたる場所で極めて高い段階にある。バスケットのうち竹製品に関していえば、竹の生育に適した高温多湿な地域は同時に稲作地域でもあり、われわれのデータの上でも竹製品と稲作（1307, 1310）の項目を共有する民族は、東南アジア大陸部および島嶼部にきわだって多い。バスケットを用途の上から個々にみても、ざる（2601）は細く割った竹で編んだ容器という点で、かご（2605）との区別はほとんどつけにくい、かごに比べて比較的底が浅く、水気のあるものを入れるために使われる場合が多い。したがって台所用容器としてよく用いられている。かごは土器よりも持ち運びが容易であるところから、農耕、漁撈、あるいは運搬の用具としても用いられる。箕（2603）は穀物とゴミを選別するために、また、ふるい（2602）は主として穀類を粒度によってふるいわけのために用いられる道具であることから、これらと稲作および雑穀栽培（1309）との相関が明確にみとめられる。

パンダナスの葉製かご（2604）はデータでも明らかなように、パンダナスが生育する地域にしか出てこない。現地ではイモ類などを収穫したり、獲物を捕えたりしたとき、その場でかごを編み、手際よくそれらの収穫物を家へ運ぶという実際的な方法が取られる。パンダナスの葉製かごは、東南アジアの島嶼部からオセアニアにかけてのいわゆるオーストロネシア語圏に卓越し、なかでも太平洋諸島地域に圧倒的にみとめられる。データの上でも、タロイモ・ヤムイモ・料理バナナの栽培、および、ブタ飼育の諸項目との共有度が高く、“オセアニア”のイメージと重なっている。

* 国立民族学博物館第5研究部

2. 土 器

土器の発明は年代的にかなり差異はあっても、地球上のかんりの地域で別個に発明された可能性がある。われわれのデータにおいても土器製造(2607)の出現率は高い。ただし、ポリネシアでは材料になる土を欠く地域が多く、土器製造はあまり一般的ではなく、このデータでもフィジーを東限にして、土器製造の存在は報告されていない。土器の成形方法としては、一般的に、手づくね法(2609)、輪積み法(2610)、巻上法(2608)、こう打法(2611)があり、高文化にみられる方法として、ロクロの使用(2612)がある。われわれのデータにも、ロクロはこの定説どおり、ビルマ、ベトナム、ジャワの高文化地域に使われている。そのうちでもビルマは、上記4つの成形方法のすべてを有している。また東南アジア全体では、手づくね法がもっともよく採用されており、とくに、アッサム、ビルマ、セレベス、大スンダ列島、小スンダ列島の諸部族に目だつ。

つぎに多いのが、こう打法であり、やはりアッサム、ビルマをはじめとして、ボルネオやスマトラにも出現している。なお、タイの彩色土器(2613)は青銅器時代からの歴史を負っているとも考えられる。メラネシアでは、パプアニューギニアから、アドミラルティー、ソロモン、ニューヘブリディーズ、ニューカレドニア、フィジーにいたるまで土器製造がみられる。

メラネシアへの土器の流入ルートについては、ソルハイム(Solheim II)による興味ぶかい報告がある[SOLHEIM II 1968]。かれは、東南アジアからメラネシアにかけて、21箇所の土器製造地域をえらび、その粘土採集から、成形、仕上げまでのさまざまな工程とその特長を80余りの項目にし、その有無を調べ、さらにそれら地域間の相関度を地図上に等値線であらわしてみた結果、土器製造がフィジーを東限とするメラネシア地域におよんだルートは、大きく二つ現われるという。その一つは、北方(おそらく日本あたり)から、台湾、フィリピン東方、カロリン西方およびアドミラルティー、ニューギニア東南海岸、さらに東へ進み、ニューヘブリディーズ、フィジーにいたるルート。もう一方は、東南アジアに発し、インドネシア、フィリピンを経て、アドミラルティーからフィジー諸島に抜けるルートである。そして、北方ルートにおいては巻上法が、東南アジアルートにおいてはこう打法が顕著であり、両ルートともに手づくね法をともなっていると結んでいる。